

令和8年2月20日

## 令和7年度とうきょう すくわくプログラム推進事業 活動報告書

園名	千代田区立番町幼稚園
所在地	千代田区六番町8

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

#### 「光」の探究

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子供たちの興味関心、園の特色など)

番町幼稚園は、午前中に保育室に光が差し込む、また、階段にはスタンドグラスがあり、美しい色が差し込む階段を上って保育室に向かう環境がある。その環境を最大限に生かしたいと考え、昨年度は子どもたちと「光」の探究を行った。昨年度は人工的な「光」を中心に子どもたちと、光の透過性や影など、知を深めていった後、自然の「光」に気付いたり、遊びに「光」を取り入れたりする姿が見られた。探究が続きそうであることと、昨年の経験を生かして、更に探究を深めたいと考え、本テーマを設定した。本園は、『番町ラボ』という場を設置し、探究活動を行っている。

### 2. 活動スケジュール

6月2回(5歳児) 以降は日常の保育の中での取組

2月2回(3歳児) 以降は日常の保育の中での取組

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

<準備した素材や道具>

ライトテーブル、OHP、スクリーン、クリップ式ライト、懐中電灯、鏡2種、カラーセロファン、カラーシート、オーロラシート、アクリル管、透明ビニールホース、糸巻き芯、テーブルシート、布、ホログラムシート、ガチャガチャカプセル、オーナメントボール、アクリル積み木、コースター、自然素材(ツル、マツボックリ等)、アクリルドーム、フィギュア、緩衝材等

#### 4. 探究活動の実績

##### <活動の内容>

5歳児は昨年の探究以降、日常の保育でも光を遊びに取り入れていた。今回は少人数のグループで、仲間と協同して【光と立体構成】というテーマでお話の世界を創った。友達とアイデアを交換しながら、世界が広がっていくことや、美しさという概念を共有し互いに共鳴しながら活動した。その中で光と様々な素材を組み合わせて見え方の違いを探ったり、特性を生かして構成していた。

3歳児は、初めての光との出会いとして、自分で操作できる光（懐中電灯）と大きな光（OHP）を使い、光そのものと向き合ったり、透明素材、カラーセロファン、親しんだ自然物など、身近な素材との関係性を探っていく活動を行った。光源を動かすと、光の大きさが変わることや、光を様々なものに当ててみると、黒い影ができるものと、色が付くものや影ができない（透過して見えないように感じるもの）があるということに気づき、繰り返し試す姿が見られた。

##### <活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

（5歳児の様子より）

番町ラボの天井から吊るしたスクリーンを挟んで、子どもたちがそれぞれのお話の世界を作っていた。片側は、A児とB児によるお菓子の世界。

A児「ここは、チョコの池ね。」

B児「ここが。お菓子のおうち。」

A児「これ（アクリル積み木）きれいなゼリーってことにしよう！」

B児「（ライトを動かすと）見てー！大きいゼリーのお城になったよ！」

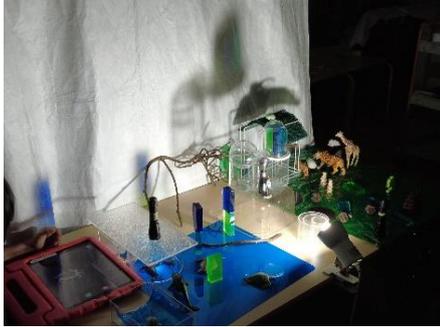
と、積み木の美しい影が光の当たり方によって大きくなることに気付いた。

おうちになったり、お城になったりと、お話の展開によって、光の照らし方を変化させる。その反対側には、海と岩の世界を作るC児は、一つ一つ素材を確かめながら、緩衝材やマットを置いたり、ずらしたり、違う素材を持ってきたりしながら配置していた。「よし」と頷いてC児側から光を当てると、A児とB児のお菓子の世界に面白い影が映ったので、反対側の様子を覗いた。

A児「うわぁ。後ろの世界ってこんな感じなんだ！」

ここで互いに自分たちの世界を創りながらも、“後ろの世界”を感じながらお話が交わっていった。

## <活動の様子>



## 5. 振り返り

(振り返りによって得た保育者の気づき)

5歳児の活動【光と立体構成】では、子どもたちがお話しの世界、光の中での世界観を創造する際イメージがしやすいように、大判のカラーセロファンや、大型の鏡と、今回は精選したフィギュアを環境として用意した(動きが生まれるような生き物のフィギュアの他に、世界作りのための、木の形の積み木など)。実際に子どもたちはそのフィギュアを手に取りながら、何が住む世界にしようか決める姿や、作った世界にフィットする登場人物として使っていた。「形あるもの」は子どもたちのイメージを想起させやすい反面、そのもの自体にひきつけられてしまう性質が強いと感じたため、フィギュアを出す際には細心の注意を払う必要があると感じた。

また、同じ世界を作っていく中で、一人が持ち込んだ設定やストーリーに対し、「それ面白い。」「じゃあ、こういうことにしよう!」と新たなアイデアで更に楽しくなっていくことを楽しめた活動であった。

3歳児は、自分の手元で扱える光が心を引き付けるようであった。光という素材そのものが、自分の操作によってどう変化していくのかに強く興味をひかれていた。何度も繰り返し試す中で、自分なりの仮説を立てて行う姿が見られ、仮説と違うと、驚きとともに、なぜだろうと子どもが自分で疑問を持ち、没頭していく姿から、教師が知識を教えるだけではなく、子どもたちの探究の道筋をしっかりと見極めながら、ともに進んでいくスタイルが、子どもたちの主体的な学びを育む大きな一歩であると感じた。

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

### 「色」の探究

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子供たちの興味関心、園の特色など)

昨年度この取組で、混色をして自分の好きな色を作るという活動を行った。その取組の中で、「緑」といっても、無数の「緑」が存在することを発見し、驚き、何種類もの緑を作ることに夢中になった幼児がいた。一例ではあるが、個々にその体験をし、学級で共有してきた子どもたちと、更に色について考えたり、自分のイメージする色を生み出すことが出来るようになると、子どもたちの世界が広がり、より自由に、子どもが表現したいことを実現できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

## 2. 活動スケジュール

9月2回(4歳児) 以降は日常の保育の中での取組

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

<準備した素材や道具>

ライトテーブル、筆(平、太、中、細)、スプーン、筆洗い(白、クリア)、とき皿、ビン、絵の具(赤、青、黄)、紙(画用紙、和紙、薄紙、それぞれ白2種、黒、を用意)、自然物(観葉植物、ドングリ等の実、葉、石)等

## 4. 探究活動の実績

<活動の内容>

自分のお気に入りの自然物をラボに持ち込み、その自然物の色を作ってみるという活動を行った。用意した絵の具(赤青黄)で、自分のイメージする色に近付けるために繰り返し試した。同じ色を使っても、ちょっとした配合によって出来る色が違うことに気付いたり、友達の作った色と比べ茶色は茶色でも、ニュアンスの違う茶色が存在することに気が驚いたりする姿が見られた。

また、翌日には、作った色を使って描いてみたり、絵の具が乾いて固まってしまった瓶をライトで照らして濃淡による見え方の違いに興味をもち、複数の方法で見え方を研究してみたりと、多角的に色について探究していった。

<活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

教師「お気に入りの自然物の“色”を作ってみよう。これを使うよ！」

と、赤、青、黄の3色の絵の具を示すと、

D児「ええ！」

E児「これじゃ作れないんじゃないかなあ…。」

F児「よし！『ラボ』しようよ！」

と、とにかく実験（『ラボ』）してみようということになった。

E児「これとこれで…あれなんか（予想と）違うかも…。」

D児「入れすぎたあ！」

B児「やっぱり、もっと、青（が必要）なのかなあ…。」

E児「さっきより似た感じになってきたよ！」

と、繰り返し試していった。

F児「見て！こんなに色が出来た！全部違うの！これはね、これとこれを混ぜて…こっちはもうちょっと黄色をたくさん混ぜたの。」

<活動の様子>



## 5. 振り返り

(振り返りによって得た保育者の気づき)

この色が作れないのでは、と思ったところから、「よし『ラボ』してみよう!」と、子どもたち自ら問いに向かっていく姿は、『ラボ』が子どもたちにとって、自由に様々に試してよい場所であるということが定着してきていることが感じられた。また、すぐに解が出ないような問いに対し、主体的に向き合える姿に、番町ラボの意義を感じた。

スプーン、スポイトなどを用意したことで、子どもたちが繊細に量を調節しながら、色と向き合うことができた。また、繰り返していく中でふと自分の探究を振り返り、違いに気づき、語り出したくなる、という姿があちこちで見られ、その語りを子ども同士で拾い、互いの学びを共有し合いながら探究を深めていったことは価値があった。子どもたちは、イメージしている色には様々な幅があることに気付いたり、同じように作っても細かい配合によって違いが生じることに気付いたりした。子どもたちの驚きに伴って知的好奇心が刺激され、もっとやりたい!という意欲に繋がるということも、再認識した。

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

### 「自然物」と「人工物」の探究

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子供たちの興味関心、園の特色など)

植物や、昆虫など身近な生き物に関心が高い幼児が多く見られる。その姿から、自然の面白さや偉大さに気付いたり、さらにその興味・関心を伸ばしていきたいと考え、昨年度実践を行った。ICT機器を使用し、細部を見て新たな気づきを得たことで、よく「観る」ようになる姿が見られた。しかし、昨年度は「人工物」ならではの機能美や、整った美しさ、そして自然物との違いや面白さに気付くような活動までできなかったため、今年度継続して本テーマを設定した。

## 2. 活動スケジュール

10月2回(3歳児) 以降は日常の保育の中での取組

1月2回(5歳児) 以降は日常の保育の中での取組

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

#### <準備した素材や道具>

ライトテーブル、土粘土（美濃赤土、伊賀土）、土台（鏡、木の板、アクリルプレート各種（○型、□型）、段ボール等）、スポット、霧吹き、透明カップ、ピン、ガチャガチャカプセル、タオル、自然物（石、枝、貝、サンゴ、草、葉等）、ビー玉、バネ、アクリルケース、懐中電灯等

### 4. 探究活動の実績

#### <活動の内容>

土粘土を中心に、様々な身近な自然物も組み合わせて探究を行った。

3歳児は、土粘土が自分の手の操作で形や温度が変化していく面白さを感じ繰り返し試していた。土の種類によってテクスチャの違いがあることに気づき、何度も比べ試す姿も見られた。枝や葉等、自然物と土粘土を組み合わせ、それを見立てて楽しんだ。「これはハチのお家！」等、家を創造し、互いの家を行き来する道や線路を作った。

5歳児は、土粘土そのものの質感、匂い、この土はどこから来たのか？と思いを巡らせる姿が見られた。土粘土と枝、植物、石等、自然物を組み合わせて、自分の世界観を構成したり、水を加えると次第に溶けていく様子をじっくりと探究する姿もあった。

また、別の日に行った「バネ」のラボの経験もあり、バネやビー玉等の人工物との組み合わせを試す姿もあった。

5歳児の「バネ」の探究では、バネの規則性のある構成の不思議に気づき、変化させて楽しんだり、規格が同じだからこそピッタリ組み合わせると楽しい遊びを考えたり、その形の規則性から幾何学模様のような影に興味を持ったりする姿が見られた。

<活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

土粘土と、様々な素材を組み合わせていく中で、G児が気になったのは、ビー玉であった。  
自分の指に、粘土とビー玉をくっつけ、

G児「見て！ビー玉指！！」

教師「すごい！中をみてみたいな。」

覗いてみると、ちょっぴり青みがあって、周囲の世界がぎゅっとつまったような不思議な世界が見える。

G児「うわーすごい！！」

H児「ちょっと見せて…すごい！」

H児もG児を見て同じようにやってみて、中を覗いてみたり、指をさかさまにして

H児「反対にしても落ちない！！」

G児「本当だ！！」

と互いの発見を共有しながら自分の試しとして探究していく姿があった。

<活動の様子>



## 5. 振り返り

(振り返りによって得た保育者の気づき)

土粘土を複数種類用意したことで、「土ってなんだろう?」「この土はどこから来たのか?」「幼稚園の土と色が違うのはなんでだろうか?」と、『土』そのものに考えを巡らせることができた。土粘土を中心に据えながら、自然物と組み合わせて、試したり自分なりの表現をしたのは、まるで自然の縮図のようでもあり、自然物を組み合わせていく中で、イメージが膨らみ、次々と変化させ、自分なりの世界を創造していくことで、互いの内面、その子らしさを知るきっかけにもなったと感じた。

また、その中で自然物だけではなく、人工物も組み合わせることで、相反する素材が組み合わせる面白さを感じた。

環境としては、粘土を載せる土台(ダンボール、アクリル板、木の板、鏡等)を複数用意したことで、子どもの視点、素材の見え方が変わり、そこから探究の道が広がると感じた。また、年齢によって、しっかり重みを感じられることができ、かつ、扱いやすい量を考えて設えることが重要だと分かった。

また、5歳児については、この『番町ラボ』の取り組みを3年間経験していることで、この場にある道具の使い方や、ためらうことなく自由に試す姿があり、やってみての発見やうまくいかなかったことから、「なぜだろう?」と自ら問いを生み出す姿や、友達の学びを自分に取り込み、更に発展させていく姿がどの子どもにも見られ、この取組を続けてきたことの成果を子どもの姿から感じた。

以上